

平成二十九年（二〇一七）三月二十五日発行
『大倉山論集』 第六十三輯 抜刷
（公益財団法人 大倉精神文化研究所）

近代日本キリスト教社会貢献論

— 小林富次郎・黒澤西蔵・森永太一郎 —

峯岸英雄

近代日本キリスト教社会貢献論

— 小林富次郎・黒澤西蔵・森永太一郎 —

峯 岸 英 雄

目 次

はじめに

一 小林富次郎

二 近代日本とデンマーク

三 黒澤西蔵

四 森永太一郎

おわりに

キーワード

慈善券 夜学校 禁酒運動 田中正造 賀川豊彦

興農義塾・野幌機農学校 エンゼル精神 河辺貞吉

福田平治 松江バンド 小倉昌男

はじめに

近代日本におけるキリスト教の社会貢献の軌跡を辿る時、広義にはセツルメントを軸とした社会福祉の実践であり、具体例としては、岡山孤児院創設者・石井十次。感化事業家で家庭学校創立者・留岡幸助。日本救世軍士官・山室軍平。社会運動家・賀川豊彦らの活動と業績が挙げられる。一方では、クリスチャン実業家による教義理念解釈の実践行動がある。杉山博昭はキリスト教社会福祉史研究の視点から次のような理論を展開した。

近代日本以降の社会福祉の歴史をたどるとき、明確なキリスト教信仰に根ざして社会福祉実践を試みた人々が存在することは明らかである。これを単に近代日本において公的な救貧制度が未発達ななかでの、民間の自主的取り組みとしてみるのだけでは、実践が生じた客観的背景を説明することにはなっても、実践への主体的なエネルギーを解明することはできない。したがって、キリスト教信仰を前提としてなされた社会福祉実践を限定して分析することは、社会福祉の特質を読み解くうえで大きな意味がある¹⁾。

本論では、「クリスチャン実業家による教義理念実践行動」の具体例として、ライオン歯磨創業者・小林富次郎（二八五二・嘉永五年～一九一〇・明治四十三年）。雪印乳業創業者・黒澤西蔵（一八八五・明治十八年～一九八二・昭和五十七年）。森永乳業創業者・森永太一郎（二八六五・慶応元年～一九三七・昭和十二年）を取り上げ、背景としての宗教的源流の考察を基にして、「主体的エネルギー」の活動理論を検証していく。

一 小林富次郎

後に「算盤を抱いた宗教家」「算盤の聖者」と称される、小林富次郎（以下、富次郎）は埼玉での酒蔵の一族経営

の不振から上京し、向島の石鹼工場「鳴春舎」に入社後、併業として神戸の石鹼業「鳴行社」播磨幸七の推奨で燐石業に活路を見出す。しかし、石巻に開設した軸木製造工場の稼働開始直前の明治二十三年（一八九〇）、東北大洪水に遭遇し、運搬用の筏が流失したことで多大な負債を抱えてしまう。想い余った富次郎は北上川への投身自殺を謀る。そのとき脳裏に「すべての懲治今は悦ばしからず、反つて悲しと思はる。然れども後ち之に由りて鍛錬する者には、義の平康なる果を結ばせり」（ヘブル人への手紙12―11）という聖書の一節が浮かび、「今日の艱難は皆是れ天父の愛の鞭」と悟る。

奮起した富次郎は、明治二十四年（一八九一）、神田に石鹼と燐寸の原料取次「小林商店」を創業する。そして、石鹼業の季節変動による売上の流動化、工場生産の有閑期を打開すべく、事業拡大の方策として、高まる口腔衛生運動によって活況を呈していた歯磨業界に着目し、牧師・北山巖から外国歯磨の製造事情を教示され、更に千葉医学専門学校・平野一貫の著作も参考として歯磨製造に着手し、明治二十九年（一八九六）七月、「ライオン歯磨」が誕生する。

遡る事、明治二十一年（一八八八）に富次郎は神戸多聞教会で、熊本バンドの重鎮であり、自由神学を標榜した海老名弾正門下で、同志社出身の長田時行²から受洗している。間接的に海老名と知遇を得た富次郎は、東京へ転出後、教会混乱と本郷大火による苦難の海老名牧師時代の本郷教会を支援することになる。後年、海老名が「眞に余を知る者は一小林あるのみ」（加藤直士『小林富次郎傳』一九一一・明治四十四年十一月、警醒社）と評するほどに富次郎は信頼されていた。

富次郎にとって、信仰力を支える聖書の愛読は事業に邁進させる原動力となる。自宅では大型聖書を開き、移動中には小型聖書を常に携帯し、青赤黒の鉛筆で所感を記入していた。その聖書の扉には、敬虔崇高に「生命の糧」と記

してあった。嘗て、救世軍の山室軍平は富次郎の聖書愛読を「実行的」と評したように、家庭、事業、社会とあらゆる場所と場面で聖書が活かされていることを富次郎自身が実感し、証明するものであった。事実、家庭礼拝を欠かさず、自社内でも自ら聖書講義を実践していた。³⁾

富次郎は教義理念解釈を社会貢献として、以下の三点で具現化を図った。

(一) 慈善券

明治期の歯磨業界は筆頭格の「ダイヤモンド歯磨」を始め「ツバメ歯磨」「バイオレット歯磨」など群雄割拠であり、品質向上は勿論のこと、何より社名と製品名の認知が急務であった。口腔衛生の重要性を拡張する使命を感じた富次郎は通常の新聞広告だけでなく、実物見本を携帯し、「ライオンはみがき」と染め抜いた幟を掲げ、音楽隊と共に全国各地を行進する「楽隊広告」を展開した。こうした広報戦略の一環として、「時事新報」で読んだアメリカの石鹼会社カーク商会の「慈善券」活動に感銘し、自社製品に添付することを想いつく。広告文の校閲を「時事新報」記者に、実施方法を懇意のキリスト教関係者にそれぞれ依頼し、具体的には価格三厘の小袋入りライオン歯磨の裏面に一厘分の慈善券を添付して販売し、購入者が支援したい慈善団体に空袋を送付し、受け取った団体がライオン歯磨を通して現金化する、今日のベルマークに近似した、またコーズマーケティングの魁的システムであった。

富次郎は「慈善券の趣旨」で「博愛慈善」「慈愛済民」の精神の必要性を社会に訴えた。慈善券の実効例として、キリスト教信仰に基づき、ペスタロッチの労作教育ヤルソー「エミール」の影響を受け、ジョージ・ミュラーの孤児事業を模範として石井十次が運営していた岡山孤児院がある。キリスト教人脈から同院の活動に共鳴した富次郎は、定期的に寄付していたが、個人献金の限界を痛感していた。同院ではバーナード・ホームの「家族教育」を規範とし

た、保母一人に対して十人程度の子供が小舎内で、職業教育を施し、自立心と自尊心を育み、社会人としての精神修養を培う「コテージ（小舎）システム」を施行していた。ライオン齒磨慈善券の寄付はこのコテージ建築費に充当され、富次郎への感謝の念を込め、小舎群は「ライオン館」と命名された。更に、石井は桑園栽培を中心とした農村共同体の構築化を企図として宮崎県茶臼原に分院を開設。そのための土地購入にもライオン齒磨慈善券が充当され、「ライオン山」「ライオン畑」が誕生する。

慈善券は先掲の岡山孤児院の他、東京市教育院、救世軍慈善事業部、日本赤十字社、東京感化院、出獄人保護院、家庭学校等、全国七十七団体に総金額三三六、五五四円五十錢七厘が公平に分配された。また定期的に新聞各紙に寄付金決算報告書を掲載し、明朗会計を提示したのは真摯で謹厳実直なキリスト教実業家としての富次郎の矜持であり、企業の社会的責任を果たすものであった。

慈善券は明治三十四年（一九〇一）に始まり、富次郎の死後も、養嗣子で二代目小林富次郎（本名・小林徳治郎）に受け継がれ、大正九年（一九二〇）にその役割を終えるまでの二十年間継続され、多くの成果と功績を残した。⁴

（二）夜学校

キリスト教を基盤とした夜学校教育は、新渡戸稲造が創学し、作家の有島武郎も運営に携わったことでも知られる。札幌遠友夜学校、アメリカ人宣教師ジャドソンが開学した貧困層対象の松山夜学校（愛媛）を始めとして数多い。富次郎もまた、教義理念の発露として「新田夜学校」を神戸時代に設立していたが、明治三十四年（一九〇一）十二月、東京小石川の齒磨工場内に「小林夜学校」を開設した。夜業分の賃金を補填し、労働運動家・鈴木文治、本郷教会牧師・野口末彦と和田信次、日本画家・栗原玉葉、歌人・野口精子（野口末彦の妻）ら、いずれも海老名弾正に所縁のある人物を講師として招き、未就学の工具や結婚前の女工に裁縫や教養を身につけさせた。夜学校開設の原点は「人

の頭たらん者は反って人の僕ならん」(マタイによる福音書20—26) という聖書の教えがあり、工員は利益生産の道具ではなく社業発展の「協同者」である、という認識があった。

(三) 禁酒運動

賜チフスの大患後、富次郎は家業が酒造業で、自らも飲酒癖があり、弊害を体感していたことから禁酒を断行する。個人のみならず「店則」に「飲酒喫煙を禁じること」を第一に掲げ、従業員や取引先に対しても禁酒を励行した。

欧州を起源とした禁酒運動は、低賃金労働者の貧困による飲酒習慣が引き起こす健康問題、治安悪化等を改める更生と救済を包含した社会改良の意味合いがあり、アメリカにおいては南北戦争後の経済対策としての移民流入に対するキリスト教文化を固守する役目もあつた。日本では、米国基督教婦人矯風会のレビット、アッカマンによる禁酒遊説とクリスチャンでハワイ総領事を務めた安藤太郎が明治三十一年(一八九八)、日本禁酒同盟会を組織したことから運動が活発化するが、内実は道徳と倫理、精神管理が色濃い運動であつた。事実、富次郎も禁酒を商業道徳の問題として捉えていた。富次郎は禁酒活動から、企業倫理の立場で健康の重要性を説き、克己心を養い創業に臨むこと、信用こそが商業の優先条件であることを社員に学ばせた。

尚、同盟会では幹事として活躍した富次郎の功績を称賛し、機関誌「國の光」特別号として、表紙にライオンの姿絵を施した「ライオン号」を刊行している。

明治四十三年(一九一〇)十一月四日、胆石症を悪化させた富次郎は病床に就く。主治医は、ベルツに師事し、東洋一のサナトリウム「南湖院」(茅ヶ崎)の創設者でクリスチャン医師の高田畊安。高田は海老名弾正の論説に共鳴し、下谷教会から海老名牧師時代の本郷教会に転会し、所属の富次郎と親交を深めた。「わしは今死ぬのぢやない、生き

るのだ、神様と一所にをるから一寸も心配はない、わたしのために嘆いて呉れるな、たゞお前達（養嗣子の小林徳治郎ら）は體を大切に永く丈夫で各自の天職を盡して呉れ」という遺言を残し、教友の讚美歌と聖書朗読の中、同年十二月十三日、キリスト教事業家としての五十八年間に亘る生涯の幕を閉じた。三日後、富次郎が理事を務めた「東京基督教青年会」（後の東京YMCA）会館で営まれた葬儀では、「恩師」海老名弾正の説教、「懷刀」加藤直士と禁酒運動の同志である安藤太郎の弔辞、慈善事業を通じて深い親交があった、救世軍の山室軍平、家庭学校の留岡幸助らの追悼演説、全国の慈善団体からの花輪、多数の弔文が寄せられた。参列者は数千人、葬列は一キロにも及んだ。それは、企業利益を信仰と教義理念に基づき社会還元と社会貢献に奉仕した富次郎の功績を讃えるものであった。⁷⁾

二 近代日本とデンマーク

キリスト者、内村鑑三の講演録『デンマルク國の話』（一九一三・大正二年二月、聖書研究社）は副題に「信仰と樹木とを以て國を救ひし話」とあるように、隣国ドイツとの敗戦後、軍人ダルガスの植林事業に代表される、デンマークの復興要因を分析して、国家の興亡には「民の平素の修養」「天然の無限的生産力」「信仰」の三点が肝要であると説いた。同書は内村の非戦論展開の論拠の一例ともされるが、内実は疲弊した日露戦争後の農業事情を憂いた内村による大正初期からの「デンマーク・ブーム」を反映した、酪農・養豚・鶏卵業を基盤とする小国主義的農業立国を構築した理想国家像としてのデンマーク賛辞録であった。

第一次世界大戦後の農村経済悪化を克服するため、大正十年（一九二二）、台湾総督府で殖産部門経験者の宮尾舜治が北海道庁官として赴任し、ケプロン、ダンが唱えた有畜農業方針による農政を実施。農業技師で欧米農業事情の視察経験者である山田勝伴らをデンマークに派遣すると共に、フェンガーらデンマーク農業者を招聘し「デンマーク

農業」の実例導入による農村振興策を提示した。その流れから「農村自治」を唱えた農本主義者、山崎延吉の思想を演繹した産業組合指導者、岩瀬和市らの主導で蔬菜、果樹等と家畜を融合した有機農業を碧海郡安城町（愛知県安城市）に根付かせ「日本デンマーク」と称される農業先進地として確立する。更に、従来の札幌農学校（アメリカ式大農法）、駒場農学校（日本式小農法）を基準とした生産技術や品種改良等の農学士養成教育から、平林広人の「興農学園」（沼津）、松前重義の（東海大学の前身）「望星学塾」（武蔵野）に代表される、知識偏重を排斥し、共同生活と農民教養を重視して、詩人・牧師のグルントヴィによって創建されたデンマーク国民高等学校（フォルケ・ホイスクーレ）留学経験者による実践農業と農村文化を基礎とした人間教育機関「農民高等学校」が各地に誕生する。また、酪農・蔬菜・鶏卵業等の農業を体系的かつ広汎、円滑に運営していく各種協同組合がデンマーク農業の影響下で展開されていく。

こうした日本のデンマーク受容史に位置し、酪農と乳業、乳製品の開発と販売、流通の構築からキリスト教を背景に多方面で社会に貢献したのが、黒澤西蔵と森永太郎であった。

三 黒澤西蔵

茨城の貧農青年だった黒澤西蔵（以下、西蔵）は足尾鉍毒事件関連の田中正造の活動に感銘し、田中の秘書を務め、その働きぶりから「小田中」と称されたが、農民救済運動の戸別訪問時に家宅侵入罪で前橋監獄に収監される。その西蔵のもとに聖書を持参し、訪れたのが足尾鉍毒事件の運動を支援していた、鉍毒地救済婦人会代表で日本基督教婦人矯風会副会頭・潮田千勢であった。聖書を耽読した西蔵は爾来、キリスト教に裏付けされる生涯を送ることとなる。

明治九年（一八七六）、西蔵は近代日本酪農の祖、エドウィン・ダンが開設した真駒内牧牛場の牧夫を務めた、米

国酪農留学経験者の宇都宮仙太郎に酪農を学ぶ。西蔵は宇都宮の説く「第一に役人に頭をさげなくともよい。第二に牛には嘘をつかなくてもよい。第三に牛乳が飲める。牛乳は人を健康にする」という「酪農三徳」に心酔し、酪農の道を進むこととなる。以後、西蔵と宇都宮は二人三脚で日本酪農界を牽引していくこととなる（この北海道時代の明治四十二年＝一九〇九、西蔵は兵役後、日本メソジスト札幌教会で杉原成義から受洗している⁹）。宇都宮は、効率的で高収益が望めるデンマーク集約農業の展開を主張していた。西蔵もまた、乳牛飼育のために化学肥料等に頼らぬ地力培養強化の循環農法としてのデンマーク農法を実践していく。

酪農を軌道に乗せた西蔵が取り組んだ課題の一つが、酪農業の連携と組織化であった。関東大震災時に「災害援助」という名目で、アメリカから大量の練乳が送られ、過剰在庫と市場暴落の混乱で、北海道酪農界は窮地に陥った。西蔵は所屬していた札幌酪農組合員に働きかけてデンマークの協同組合活動を参考に、「畜牛家協議会」を経由して大正十四年（一九二五）、牛乳・バター・チーズ・卵・肉製品等を網羅した、後の雪印乳業の母体「保証責任北海道製酪販売組合総合会」を設立し、会長に宇都宮仙太郎、専務に西蔵が就任した。西蔵の信念は北海道農業全体を、農民が主導する東洋のデンマーク化を意図するものであった。

そして、製品イメージ向上、一般周知の為に商標を発案し、北海道の象徴としての雪の結晶と北斗星に、同組合総合会所属のバター技師、佐藤貢（後の雪印乳業社長）の母校・旧札幌第一中学の校章の雪のデザインを組み合わせて「雪印」マークが誕生する。

こうした西蔵の酪農業の協同組合運動推進の蔭には、キリスト教精神を基礎に労働運動、農民運動等の社会事業を展開していた賀川豊彦の存在があった。賀川には自らの運動理論を平易に解説する方策として小説を用いる側面（作家としての技量は文芸評論的には聊か稚拙という指摘は免れないが）があり、『死線を越えて』（一九二〇・大正九年

十月、改造社）は神戸貧民街での伝道と救貧活動を描いた自伝で、大正期のベストセラーとなる。その作品群の中に、農業・農村文化向上を目指した産業組合中央会の発行雑誌「家の光」連載小説、『乳と蜜の流る、郷』（一九三五・昭和十年十一月、改造社）がある。福島の子村出身の青年、田中東助の軌跡を通して、デンマーク農業を意識した、有畜農業、産業組合、信用組合やデンマーク国民高等学校を理想として、賀川が設立した実在の「武蔵野農民福音学校」の意義を、ヒロイン・鈴子とのロマンスを交えながら解説していく展開であり、「近代日本のデンマーク」受容の概要を集成した内容となっている。賀川は理想的なデンマーク社会の具現化を図る指導者としての西蔵の酪農業界での活動に早くから着目し、親交を深めた。

西蔵は、理想のデンマーク方式の酪農を北海道で実現させる方策として後継者育成の教育施設の整備を手掛ける。昭和九年（一九三四）二月、西蔵は「農民精神の涵養」「産業組合主義の普及及び徹底」「畜産及び農業経営に關する技術進歩發達」「乳製品製造に關する技術員の養成」¹⁰を建学目的とした全寮制の「社団法人北海道酪農義塾」（札幌郡札幌村）を設立し、自ら塾長に就任した。農業従事者養成の酪農科、酪農従業員養成の製酪科を設置し、塾内では西蔵の農業観を表現した「一、農民は誠其物たれ（農民は正直であれ・天地と心を通わせる）」「一、農民は天地の經綸に従へ（其土地の役目を知り研究せよ）」「一、農民は土を愛せよ（土地を肥やせ）」「一、農民は勤勞を尊び儉約を守れ（無駄をせざうんと働け）」「一、農民は協力一致せよ（産業組合に依て團結せよ）」という指導精神「農民道五則」が掲げられ、誠心・責任・規律・節制・礼儀・流汗悟道・互議協同・禁酒禁煙を基礎とした塾内規則によって運営された。

しかし、デンマーク国民高等学校を模範としながら、同塾は昭和十七年（一九四二）「興農義塾・野幌機農学校」（札幌郡江別町）へと発展していく過程から次第に皇道農本主義的教育へと傾斜していく。戦争の終結により、関係して

いた戦時国策の公益会社「北海道興農公社」の改組、「北酪社」へのGHQからの過度経済力集中排除法適用という苦難を乗り越切った西蔵は、自らの哲学真理「健土健民」の精神から、あらためてキリスト教の原点に立ち返った民主的な酪農学園の創設を画策し、デンマーク国民高等学校の学祖、グルントヴィの三愛主義に倣い「神を愛し、人を愛し、土を愛する、有為なる農業者を養成することを目的」とした酪農学園短期大学（北海道江別市）を昭和二十五年（一九五〇）に開学する。西蔵はそれまでの精神的学園運営の反省から、戦後の来るべき国際社会に適合した、理論的且つ科学的な後継者育成を目的とした教育方針を貫徹するため、クリスチャンである北大農学部卒業の農学博士で岐阜高等農林学校（岐阜大学農学部）教授の樋浦誠を初代学長として招聘する。樋浦は大学に通学できない農村青年を対象とした「三愛塾」を北海道内外で開設し、西蔵の理想実現を支援した。

更に、西蔵は昭和三十五年（一九六〇）に酪農学園大学を開学。「窮乏の底に沈める国興せ乳房持つ神我と共なり」と謳いあげる同校の愛歌「酪農讃歌」を賀川豊彦が作詞している。

四 森永太郎

森永乳業は森永太郎（以下、太一郎）が創業した森永製菓の主力商品キャラメル原料である練乳の自社製造が急務となり、大正六年（一九一七）、先鋒企業の愛国練乳を買収し、日本練乳を創設したことに始まるが、背景には「国家百年の農業育成上における酪農振興の意義に深く共鳴¹⁾」した、太一郎自身のデンマーク農業理論解釈の昇華があった。西蔵らを取り組んだ理論と比較して実現性が低いものの、具体例として、関東大震災直後の日本再興策を考慮した農家が副業として牛・山羊・綿羊・養豚等、家畜を飼養すれば莫大な国富を生む、という独自の理論書『家畜奨励論 附録東京府下大島』（一九二四・大正十三年四月、東京堂）を著している。

関東大震災直後、太一郎は在庫のコンデンスミルクと袋詰ビスケットを救済品として放出することを残留していた社員に命じた。更に「乳呑児又は病人でお困りの御方へミルクを差し上げますから遠慮なく会社へ御出下さい」との新聞広告を掲載した。自らも救済品を配布した「森永」中興の祖、大野勇は太一郎の対応を「食品事業の公共性と、森永に働くことの真実の意義を強く感じた」と記し「エンゼル精神」と称した。周知の「森永」エンゼルマークは太一郎が二度目の渡米から帰国後、日本での菓子行商時代を支援したバック米国公使夫人の助言と、当時の主力商品のマシユマロがアメリカでエンゼル・フードと呼ばれていたことで作られたものだが、背景には自身のキリスト教体験と聖書講読に起因している。

明治二十一年（一八八八）、最初の渡米時に太一郎はハウスボーイ生活で、アメリカ・メソジスト監督教会二階での寄宿の際、米国で日本人キリスト教団体「福音会」を組織し、伝道活動に従事していた美山貫一を通じて、メルマン・コルバート・ハリスと出逢う。ハリスはアメリカ・メソジスト監督議会の日本伝道決議によって、聖書翻訳に尽力したマクレー、津田仙夫婦に授洗したソーパー、徳富蘆花に授洗した飛鳥賢次郎を仏僧から改宗させたデイヴィンソンらと共に、明治六年（一八七三）来日し、函館中心に布教伝道し、札幌農学校第一・二期生の信仰指導を校長のクラークから依頼され、内村鑑三らに授洗した。明治三十七年（一九〇四）にはアメリカ・メソジスト監督教会の日本及び朝鮮年会（宣教）監督として再来日。死去する迄、青山学院構内のハリス館（戦災で崩落）に居住していた。

幼少期からキリスト教を忌避していた太一郎は「無料で泊めてくださるから、ほんの義理で集會に出席していた」¹³状態で、入信の薦めを拒絶していたが、聖書を耽読し教義理念に感銘を受けて明治二十三年（一八九〇）、ハリスより受洗した。帰国した太一郎は近親者に福音伝道活動を試みるが「多感直情」の性格も災いし「幼稚で忍耐力のない欠點だらけ」の信仰力で失敗。明治二十五年（一八九二）、製菓技術修得を志して再度渡米するが、この時期に美山

貫一の後を引き継ぐ形で、後に聖書学院院长となる笹尾鐵三郎と共に日本人メソジスト教会牧師として、カリフォルニア、ワシントン等で邦人伝道に従事していた河辺貞吉と信仰面で交流を深め、河辺、笹尾、秋山由五郎、松野菊太郎、木田文治らと伝道団体「小さき群」¹⁴に参加する。これが、後の「日本自由メソジスト教団」の原点となる。事業専念中、一時的に信仰から離れるも退任後はキリスト者として福音活動に精進する太一郎の所属会派は日本自由メソジスト教団であった。

同教団は当初、河辺が大阪を中心に関西地区を伝道対象としていたが、明治二十八年（一八九五）、自由メソジスト教会日本初代監督に任命されて帰国した、石井十次の岡山孤児院の後援者でもあった柿原正次により漁港の淡路島福良で伝道を展開する。当時の様子を明治四十二年（一九〇九）に福良教会に赴任した、後のキリスト教出版社「日曜世界社」社主の西阪保治が語る。

教会の看板はかかっている、もと畳屋だった一戸建の借家、聖日の礼拝出席者は数名を出たことがなく、夜の集会も薄暗い石油ランプの下に聴衆は家内がただ一人、つくねんと腰かけていた。日曜学校にも全然子供は集まらなかった。村の青年たちのいたずら半分の礼拝妨害にもずいぶん悩まされた。数年前にここに開拓伝道を始められた日本自由メソジスト教団宣教師で、私の霊の生みの親である恩師河辺貞吉先生からほぼ様子を聞いて覚悟はしていたものの、余りの不振無活気に失望¹⁵（した）

東京、横浜、神戸などのキリスト教最先端地域と違う、地方の開拓伝道はまさに苦難の連続であった。こうした同教団の福音活動の支流として島根県「松江バンド」の存在を考えなければならぬ。札幌バンドがクラーク、横浜バンドがヘボンとブラウン、熊本バンドがジェーンズのように主要地域福音伝道団体の核が外国人宣教師であったように、松江バンドも明治二十六年（一八九三）、英国聖公会宣教師バークレー・バックストンの指揮下で同志社派の竹

田俊造、藤本寿作らが信仰訓練を受けたことに始まり、後に河辺貞吉ら「小さき群」の組織員が加わる。路傍集会、大天幕伝道会など定点伝道に固執しない、自由かつ本格的な開拓伝道を展開するため「日本伝道隊」を組織するなど、その篤き信仰萌芽の温床は福田平治が経営する印刷所「博廣社」（松江市殿町）にあった。祖父母が興した印刷業を引き継いだ福田の転機は明治二十六年（一八九三）の松江大水害時の孤児救済で、明治二十九年（一八九六）に「松江育児院」を創設する。その後、福田は大正九年（一九二〇）、「愛隣社」を設立し、山陰地域の社会事業に貢献する。また、妹の福田与志（ヨシ子）も明治三十八年（一九〇五）に松江私立盲啞学校を創設している。福田は孤児院運営と実態調査のために交流していた岡山孤児院の石井十次と懇意になり、キリスト教信仰に目覚める。同じ松江での活動から福田とバックストンが親交を深めるのは自然の成り行きであった。バックストンは、松江の赤山に修養道場・赤山塾を併設した自宅を拠点に、伝道活動と聖書講義を行う。その講義内容を纏めた説教集『赤山講話』は明治三十四年（一九〇一）十二月、福田が孤児院に専念するために廃業した博廣社の設備を継承した、松江育児院活版部より刊行されている。太一郎の「エンゼル精神」の背景は、アメリカ時代の信仰同志、河辺貞吉も加わる松江バンドの存在と活動であり、具体的には福田平治が展開した孤児院運営を基礎とする、キリスト教社会福祉貢献の実践であった。

太一郎もまた富次郎同様、夜学校を開設している。大正初期、芝田町工場内に学用品を「森永」が負担した、裁縫科・外国語講習科等を備えた夜学校であった。同校は墨田学校と改称、発展して更なる教育環境を整えていく。他にも従業員の健康管理のため診療部を設置すると共に、福利厚生を充実させるために森永共済会を設立した。こうした「共存共栄」「労使一如」の事業精神は、労働と伝道を両立したパウロを意識させる行動であり、苦難の米国修業時代を支えた太一郎の聖書講読の昇華であった。

昭和十年（一九三五）、太一郎は「森永」を退任し、事後を信頼篤い松崎半三郎⁶に託す。やがてキリスト教に回帰し、

各地の菓子小売店を訪問しながら「我は罪人の首なり」を掲げて、周辺教会で講演会を開く。所属教派の日本自由メソジスト教団教会への訪問だけでなく教派に拘泥せず招聘されればどこへでも訪れた。また、同年十一月から数ヶ月間、ハワイに滞在し講演活動に従事し、森永郎・代々幡ガーデンの敷地内にキリスト教集会場を設立するなど、キリスト教事業に専念した。晩年の太一郎の長い白鬚を長男、森永太平は「宗教への精進を重ねた時代」の証と称した。¹⁷⁾昭和十二年（一九三七）一月二十四日、太一郎は召天。享年七十三。キリスト教との出逢いから真の生涯が始まり、国民的企業「森永」が生まれた。

おわりに

「クロネコヤマト宅急便」創始者、小倉昌男（一九二四・大正十三年～二〇〇五・平成十七年）もまた、キリスト教実業家である。戦後間もなく父、小倉康臣が創業した旧・大和運輸に入社する。事業を継承し、会社を急成長させた小倉は七十歳で退任すると、自ら設立したヤマト福祉財団理事長に就任し、障害者福祉事業に専念する。小倉は入社直後に結核に罹患し、死を覚悟したとき内村鑑三の著作を耽読後に救世軍信徒となり、後にカトリックに改宗した。小倉は各地の教会への寄付行為の他に、障害福祉を慈善レベルから経済的自立までに高めるため、障害者を中心に運営されるパンのチェーン店「スワン・ベーカー」を事業展開するなど福祉面で多くの功績を残した。小倉の信仰心と経営理念の合致の背景は複雑な家庭環境と家族関係を含む私生活にあったが、いづれにしろ事業成果の社会還元¹⁸⁾の根源がキリスト教であった。

江戸時代中期、大坂商人らによる「論語」「孟子」を中心に経世の実現を試みた、大坂の学問所・懐徳堂や二宮尊徳の「至誠」「勤勞」「分度」「推讓」の報徳仕法のように、個人の修養的特質である「徳」を基盤とした利益と道徳の

共存から社会還元化が図られてきた。本論で触れた三人のキリスト教実業家の足跡は、明治以降のキリスト教文化によって突然に現れたのではなく、歴史と伝統の中で脈々と受け継いできた日本人の社会倫理観の延長線に位置するものなのである。

注

- (1) 杉山博昭「キリスト教社会福祉史研究の動向と本書の課題」〔キリスト教福祉実践の史的展開〕、二〇一三・平成二十五年九月、大学教育出版
- (2) 長田時行は安中教会で海老名弾正より受洗。明治十九年（一八八六）九月に神戸多聞教会へ転任。後に、各地に伝道師を派遣する日本基督教伝道会社社長に就任。晩年は東京島山にて紫苑會を組織し、個人伝道に従事した。（参考『昭和十五年日本組合基督教會便覧』、一九四一・昭和十六年二月、日本組合基督教團本部）
- (3) 富次郎の死後、その聖書所感が暦形式で整理編纂され『聖書日日實行訓』（一九一五・大正四年十二月、銀座書房）として刊行されており、編纂者の国文学者・中尾清太郎は「真に聖書は彼（富次郎）の三度の食事以外時時刻刻に生きていく力であつたに相違ない」と記している。
- (4) 慈善券活動は、時代の趨勢から「新なる時代は新なる意義を有する奉仕を要求す」との宣言をもって幕を閉じるが、明治三十六年（一九〇三）、海老名弾正より受洗し、二代目小林富次郎を襲名した養嗣子の小林徳治郎は、慈善券活動終了前から社会貢献として口腔衛生の報知と普及活動に尽力する。大正二年（一九一三）から歯科の専門家で構成した「ライオン講演会」を各地の学校、工場、青年団等で開催。併せてタブロイド判四頁の機関紙「ライオン・コスモス」を発行し、食事後と就寝前の歯磨励行など口腔衛生の重要性を積極的に啓蒙していく。徳治郎は製品を単なる商品で終わらせるのではなく、その効用と背景を消費者に科学的に理解してもらうことと、国民の健康意識向上に対する努力を怠らなかつた。また、大正十年（一

(5) 九二一)、アメリカ歯科事情を視察し、当時では画期的な小児歯科治療に着目して銀座に「ライオン児童歯科」を開設し、富次郎と同じくキリスト教実業家として教義理念の具現化を図った。他に、日本聯合歯科医會への多額の寄付、東京歯科医学専門学校(現・東京歯科大学) 学生対象の「小林奨学金」を創設し、後進の育成に尽力した。(参考『ライオン100年史』 一九九二・平成四年十月、『ライオン120年史』 二〇一四・平成二十六年七月 共に、ライオン株式会社社史編纂委員会)

(6) その他の主な店則として「信用を資本と心得ること」「客には親切に、定価は不二なること」「文明商人の氣風を養うこと」「主家の業も自己の業と思ふこと」「質素勤儉の美德を發揮すること」「博愛仁慈なるべきこと」がある。

(6) 加藤直士は、海老名彈正門下で海老名の主宰雑誌「新人」の編集に従事。日曜学校の指導書やトルストイ作品の訳書を刊行。堪能な英語力から後年、「大阪毎日新聞」ロンドン支局に勤務。小林商店には実業経験と英語力を買われ、海老名の推薦で外国貿易部顧問となる。明治三十八年(一九〇五)からの富次郎の欧米商業視察には、通訳として随行している。自社の若手従業員に東京基督教青年会の夜学校に英語学習のために通学させたように、積極的な海外戦略を推進、展開していた富次郎は英語を中心とした語学的重要性を業界の誰よりも認識しており、加藤の登用は必然であった。更なる英語修得の手段を模索していた富次郎は明治三十八年(一九〇五)十二月、語学蓄音機の輸入販売を開始。これに伴い、加藤が付属の副読本『ICS語蓄音會話篇・英語蓄音機附屬教科書』(一九〇六・明治三十九年九月、小林商店)を刊行している。また、加藤は富次郎から生涯の口述筆記を請負い、富次郎の死後「小林富次郎傳」(一九二一・明治四十四年十一月、警醒社)を纏め上げる。富次郎の伝記研究の論拠の大半が同書であることを鑑みるに、加藤への信頼は絶大であった。

(7) 富次郎の葬儀は、日活の前身である吉澤商店が撮影し、日本で撮影された最初期のフィルムとして平成二十三年(二〇一一)六月、重要文化財に指定された。

(8) 長野出身の教育家、平林広人はデンマーク国民高等学校留学経験を有し、農民青年への実利的且つ理論的な農業指導者で生粋のデンマーク通として知られる。大正末期から昭和初期にかけて『農民の國デンマーク』(一九二四・大正十三年七月、文化書房)、『デンマーク農民の努力』(一九二六・大正十五年十月、農村文化協会出版部)、『丁抹農村文化の神髓』(一九三〇・昭和五年四月、文化書房)を纏め上げている他、アンデルセン童話の翻訳やデンマーク体操の普及啓蒙にも尽力した。また、

大倉洋紙店社長、東洋大学学長を歴任し、後に大倉精神文化研究所を創設する大倉邦彦は、大正十五年（一九二六）三月から昭和二年（一九二七）一月にかけてヨーロッパ諸国を視察の途次にデンマーク、ハスレフの国民高等学校を訪問、見学したことから、佐賀に農村工芸学院を創学した。松前重義は内村鑑三とグルントヴィイの影響を受け、昭和九年（一九三四）、デンマーク国民高等学校に寄宿し、教育事情を視察（寄宿生活内容については松前『デンマーク文化を探る』一九三六・昭和十一年三月、向山堂書房Ⅱに詳しい）し、理想の教育機関「望星学塾」を創設する。「望星学塾発祥之地」碑に松前は以下の一文を寄せた。「この学塾は祖国の将来は教育によって有為なる人材を世に送るにあるとの信念からデンマーク復興の父ニコライ・グルントヴィイの国民高等学校の教育を範として開いた青年道場である」、そして「若き日に汝の思想を培え、体軀を養え、智能を磨け、希望を星につなげ」と説いた。また、鹿兒島高等農林学校要員として欧米の農業事情視察経験者である農政学者・小出満二もデンマーク理論者で、『デンマルク農民教育』（一九二六・大正十五年十一月、東京公民社）の他、自身のデンマーク観を終戦後間もない日本の姿に重ねて内村鑑三『デンマルク國の話』に似せた『デンマルクの話 敗戦のドソ底から起ち上り文化と生活を高めた平和國』（一九四六・昭和二十一年二月、産業圖書）を著している。

- (9) 杉原成義は、明治八年（一八七五）生まれの山形出身で、青山学院神学部卒業の米國赴任経験のある日本メソジスト教会派の牧師。明治三十八年（一九〇五）札幌教会に赴任。西蔵との出逢いはこの時期にあたる。晩年は日本メソジスト横浜教会（中区蓬萊町）の発展に尽力した（参考『日本メソジスト横浜教會六十年史』、一九三七・昭和十二年三月、日本メソジスト横浜教會）。

- (10) 農業学校長協会編『農村に於ける塾と道場教育』（一九三六・昭和十一年四月、農業圖書刊行會）

- (11) 『森永乳業五十年史』（一九七六・昭和四十二年七月、森永乳業）

- (12) 大野勇『わが生涯は乳業とともに 森永乳業五十年小史』（一九六七・昭和四十二年九月、デーリィ・ジャパン社）。また、大野は関東大震災時の具体的な「森永」の企業対応を以下のように語っている。「『在庫品は全部出して救恤品に回せ』という社長（注・太一郎）命令で、コンデンスミルクを井戸水で溶かし、通行人に無料接待をした。これは一日に五万人に達した。またビスケットを五十匁ずつ袋に詰め、六万人の胃袋を満たした。さらに赤ん坊用にコンデンスミルクを一かんずつ寄贈し

たほか、五万円を米を買い入れ、これを五合ずつ施米するなどした。震災後、十年くらいはお礼の手紙が来たものである」
〔私の履歴書 経済人20〕、一九八六・昭和六十一年七月、日本経済新聞出版社。

(13) 森永太郎『キャラメル王の体験談』(一九三五・昭和十年五月、日本自由メソヂスト教會出版部)

(14) 「小さき群れ」は松江市内に外郭出版社「小兵士團」を大正十年(一九二二)頃に設立し、笹尾鐵三郎の著作や獄中で受洗した死刑囚、山口豁の伝記である米田豊編集『刑臺上の感謝(死刑囚山口豁悔改録)』(一九二二・大正十一年二月)などを刊行している。

(15) 西阪保治「日曜世界社とその時代」(『日本キリスト教出版史夜話』、一九八四・昭和五十九年十月、新教出版社)

(16) 富次郎における加藤直士存在と同様に、太一郎の優秀なブレインが松崎半三郎であった。立教学院出身の貿易商であった松崎は、太一郎に懇願されて、森永製菓に入社し、共同経営者として営業を担当し、アドバルーンや電飾広告塔など斬新な広報戦略を展開した。「営利目的の事業経営は物欲の奴隷である」と説く姿勢は太一郎同様、クリスチャン実業家としての矜持であった。また、大正七年(一九一八)の米国視察後、太一郎と共に工場敷地内に従業員住宅、運動場、学校、病院を併設したイギリスの田園都市を意識した「森永タウン」を構想し、兵庫塚口に八万五千坪の用地を取得した。結果は森永ビスケット塚口工場となったが、福利厚生を充実させ、労働者の理想郷を目指した松崎と太一郎の意識は高く評価される。尚、松崎は晩年、立教大学理事長に就任。同大学では豊富な海外経験で事業を展開した松崎を顕彰し、独創的な海外渡航を計画する学生を対象とした「松崎半三郎記念奨学基金」が設けられている。

(17) 『森永製菓100年史 はばたくエンゼル、一世紀』(二〇〇〇・平成十二年八月、森永製菓株式会社)

(18) 小倉の事業と信仰、その精神的苦悩については、森健「小倉昌男 祈りと経営 ヤマト「宅急便の父」が闘っていたもの」(二〇一六・平成二十八年一月、小学館)に詳しい。